

昭和大学発達障害医療研究所所長  
神経研究所附属晴和病院理事長  
東京大学名誉教授

かとう のぶまさ  
加藤進昌



聞き手/ジャーナリスト 小川 明

造り酒屋のぼんぼん

—お生まれはどこですか。

加藤 愛知県稲沢市です。織田信長の居城があった清洲の隣町です。古い造り酒屋の家に生まれました。当主が加藤市三郎という名前を代々襲名していて、藤市酒造と呼びます。

—跡を継ぐ必要はなかったのですか。

加藤 兄が継いでいます。私は末っ子ですから、初めから「勝手にしてよい」ということでした。名古屋の東海中学、高校に6年間通いました。

—東大の理Ⅲに入って医者を目指したのはなぜですか。

加藤 東海高校はいま、やたら医学部に入る生徒が多いのです。しかし、そのころはそうではなく、医者になるのはだいたい医者の息子で、予定が決まった人という感じがありました。やる気がある人は東大理Ⅰなど工学部に行きました。私より成績の良い人はことごとく、そちらに行きました。医学部に行くのはちよつと変わり者という雰囲気がありました。私は理系を選びましたが、物理や数学が苦手、全然できませんでした。文系にしようか、迷ったけれど、「何か、手に職をつけたほうがよい」と、消去法で医学部にしました。

—文学に興味がありましたか。

加藤 心理などは面白いと思いました。高校のクラブは文芸部に所属していました。「文学部では飯が食えない」と思い、医学部コースの理

Ⅲに入りました。

—東大に半世紀前の1965年の入学ですから、一番多難な時期でしたでしょう。

加藤 駒場の教養学部ではポート部に入りました。小柄なので、コックスをやらされました。本郷に移ったあと、紛争が起こり、一年半ストライキがあつて、全員が1年留年しました。だから、卒業まで7年かかっています。

嵐の中に東大精神科へ

—嵐の中の医学生でした。東大医学部が全国の大学紛争の発火点でした。

加藤 精神科が震源地のひとつでした。しかも、東大の精神科の傷が一番大きく、回復までに約30年も長くかかりました。それだけに、昨年、(当時の教授で、最も批判された) 臺弘さん(1913~2014年)が100歳の時に行ったインタビューには気合いが入りました。

—亡くなる2週間前のインタビューでしたね。日本精神神経学会が委員会を調査して、1973年に臺さんを批判する決議までしています。

加藤 臺さんが都立松沢病院にいたころ、ロボットミイ手術はやっていないけれど、手術で取れた正常組織を研究しました。実験的にロボットミイをしたかのように非難されました。そんなことはあり得ないのに、もって回った非難の仕方とされ、臺先生は「天下の大悪人」のような書き方をされましたが、あれほど違う人は珍しい

いです。

—そういう厳しい時に精神科を選んだのは、火中の栗を拾うようなものでしょう。

加藤 ストライキなどの学生運動の経験が大きいと思います。私は自分たちのことを戦中派と言っていました。

—正しくは紛中派でしょう。

加藤 紛争のまったただ中にいました。一年半、医学の勉強はまったくしなかったです。ある意味では、労働組合のたぐいのことはかりやつていて、社会に対する関心が広がりました。もともと、人間の心理に興味があったので、フロイトの本を読んで、夢判断に興味を抱き、社会的なものにつながるようになりました。同級生の丹羽真一君(福島県立医大名誉教授)と、精神科か小児科に行くか迷い、結果的に2人とも精神科に入りました。私がいま発達障害とか、アスペルガー症候群をやっているのはその辺が原点です。

—精神科と小児科は東大の中で一番荒れた診療科ですね。

加藤 小児科のほうが荒廢の程度は長く深刻でした。看護師になる人もいないくらいでした。東大の新病棟に移るとき、小児科の問題も解決に向かったように思います。当時は、大騒ぎになり、人権派の弁護士約10人が大挙して院長室に来たこともあります。

精神科の場合は、完全に病棟派と外来派にわかれています。教授の臺先生は病棟から追

出されて、外来にいました。その下に8人、助手や講師がいて、臺8人衆と言われていました。

その後、われわれが同じ数だけ一挙に研修医として入りました。1年後に7人の助手のポストが空いたので、あみだくじをしたら、私だけ落ちました。それで、帝京大学の精神科に移りました。

—8人もよく東大精神科に入りましたね。

加藤 「赤信号、みんなで渡れば怖くない」ですよ。ばりばりの紛中派ばかりでした。闘い慣れていますから、病棟の赤レンガの人たちと対立しても、気になりませんでした。

内分泌学で研究遍歴

—当時、精神科で育った人たちは場かずを踏んでいきますね。

加藤 そういう時代でした。帝京大には3年いました。入院患者がいる病棟をそれまで経験していなかったのが、重い患者を担当しました。帝京大の医学部と病院ができたばかりで、何もありませんでしたが、良い臨床経験になりました。

—その後、研究所に行ったのですか。

加藤 千葉県市川市の国府台にあった国立精神衛生研究所の成瀬浩部長のもとに移りました。成瀬部長の東大の同級生だった東京女子医大の福山幸夫教授(1928~2014年)の小児科に1年行って、小児神経を学びました。来る日も来る日も、てんかんの子どもばかり診ていました。次に昭和大薬学部で分析化学の研究生

になって、甲状腺刺激ホルモンの微量測定法の開発に携わりました。これが学位論文になりました。

成瀬部長が新生児のマススクリーニングを始めるころでした。クレチン症、先天性の甲状腺機能低下症は、生後1、2カ月で治療すれば、完全に治ります。それをしないと、重い知的障害になってしまいます。大量の検体を測定するために放射性アイソトープはよくないので、酵素を使う微量分析法の開発に従事しました。そこから研究歴が始まり、カナダに2年間、留学しました。マニトバ大学の生理学研究室で、本格的な内分泌学を研究しました。

—留学はご家族が一緒でしたか。

加藤 子どもを1人連れていき、帰国するときには、子ども2人と、おなかのなかにもう1人いました。うちのかみさんは英語をしゃべれなくても、全然ものおじしなかったのです。よかったです。前向きな女性だと留学は楽しめます。マニトバ大学はカナダ大平原の真ん中のウィニペグにありました。

—帰国後は東京都小平市の神経研究所ですね。

加藤 それから、高橋清久先生の後任として、滋賀医大の助教授になりました。滋賀には、助教授を10年、教授になって2年いました。

滋賀医大から東大教授に

—滋賀ではどのような感じでしたか。

加藤 教授だった高橋三郎先生は今もご健在で

す。私は、滋賀で成人ぜんそくになってしまいました。多分ストレスのせいでしょう。2、3回入院もしました。真っ黒だった髪が真っ白になり、ずっと体調が良くなって、激しい運動はできませんでした。雑誌の座談会で私のやせ細った写真を見て、「あいつはがんだ、先は長くない」と言われたりしました。体重はいま54キロですが、当時は40キロまで落ちました。

——滋賀でのご研究は何ですか。

加藤 神経ペプチドです。ラットの動物実験で、ストレスや精神科の薬で脳内のペプチドがどう変わるかを調べたりしました。研究費が全然なかったのですが、製薬会社の研究者と仲が良く、助けてもらいました。製薬会社の研究所は潤沢で、100匹や200匹のラットを使って、どうということはないわけです。埼玉県にあった研究所に、正月や連休に出かけて行き、そこで実験し、論文を書きました。

——滋賀に足かけ12年いて、東大の教授になったのですか。

加藤 東大ではまず研究棟の荒廃ぶりにびっくりしました。前任の松下正明教授は、精神科の正常化に道をつけました。いま、群馬大の教授をしている福田正人君や、松沢病院の院長をしている齋藤正彦君らが、病棟派と折衝して「とにかく一緒にやろう」ということにはなっていました。完全に呉越同舟です。そこへ私が教授になって行きました。

——1990年代末の東大精神科はまだ大学紛



東大精神科の新人歓迎会で「こんなに入ったぞ」と得意満面=2001年

争の名残を引きずっていたのですか。「アカデミズムのかけらもない、臨床と酒まみれのよき時代」と振り返る人がいるぐらいです。

加藤 研究室が機能していませんでした。滋賀医大から、加藤忠史君が1年前に東大に戻って、遺伝子実験室を立ち上げるのに四苦八苦していました。ラットを融通してくれていた製薬会社の友人が、研究所の閉鎖を早めに教えてくれました。「二束三文で、研究室の備品は売り飛ばすから、早く来れば、ただに近い金で買える」という話で、加藤忠史君がトラックをチャーターして、自分で取りに行きました。それくらい何もなかったのです。

——東大精神科の研究貧乏物語ですね。

加藤 研究室の窓ガラスは壊れ、病棟もきれいではありませんでした。

なったとき、新病棟へ移転しました。2004年の国立大学法人化の準備も大変でした。当時、工学部長で、後に東大総長になった小宮山宏先生が「工学部の新しいシーズの半分くらいは医療関係だ。そっちをやっていないと、将来はない」と明言されて、医工連携の新しい組織をつくろうという流れになりました。同級生の桐野高明君が医学部長で、私が病院長でした。工学部から「同じ数の11のポストを出せ」と言われました。

——工学部よりも、医学部はポストの捻出が難しいでしょう。

加藤 医学部は教授が一国一城のあるじなので、簡単ではありません。全医局から2割、100ぐらいの助手のポストを吸い上げて中央管理にしました。それぞれの働きぶりを数値化して、それに応じて返すとしたら、もう大騒ぎです。教授会を何度やったことかわかりません。みんなが自分の都合の良い指標を勝手に出して大変でしたが、この改革で赤字体質が変わりました。私が病院長になったころは、東大総長から「どのくらい金を病院で稼げるか、プレゼンせよ」と言われて、何度もやりましたからね。

**東大病院長で数々の改善**

——法人化すれば、病院は稼ぎが大きいから、ウエイトが増えました。

加藤 赤字も大きいです。当時、250億円の収入で、支出が400億円と言われました。研

究や教育部分も含まれるので、すべてが病院のせいではないけれど、東大の評議会でもよくたかれました。病院の赤字が30億円となり、法学部長からは「うちは学部全体で30億円の予算です。あなたのところが赤字を出すと、こちらがぶつ飛ぶのです」と指摘されました。病院に対して全学が非常に冷たかったです。いまは、収入が450億円くらいになっていいると思えます。

——いまは東大病院は大繁盛して、外来も患者でごった返していますね。

加藤 接遇を改善しました。入院患者の特別室などは、ホテルに看護師を派遣して研修させたりしました。

——病院の中央診療棟を2階建て増して、22世紀医療センターを設けましたね。

加藤 5階半だったのを建て増しました。寄付を集めてやりました。大学に試算させたら、30億円というので、「やれるはずがない」と反発が随分ありました。しかし、東大本部の施設部長が「面白いですね」と言って、文部科学省にも話をつけてくれました。「前例のない仕事」に情熱を燃やす、官僚らしくない方で、助けられました。

——天皇陛下が皇居の外で、史上初めて入院、手術されましたね。

加藤 2002年12月28日の御用納めの日でした。この日は、東大病院は伝統的にあちこちの病院部署で酒盛りをしていました。そこへ院長

それから研究の再建と人事に努めました。例えば、助手の選考は、助手公選制といって、外に出た医局員も含めて投票権があり、教授と助教は投票権がなかったのです。これでは多数派が助手を占拠してしまいます。

**紛争からの正常化に苦闘**

——改革には苦闘したでしょう。

加藤 投票権を持つ医局員をどんどん入れるという戦略に変え、私が9年ほど教授をしている間に120人ぐらい入ってきました。だんだんと正常化し、病棟も新しくなり、研修もできるようになりました。助手公選制というお手盛り的な人事も消え、同窓会も再建しました。

——教授になって最初「ヒヤリングをする」と言ったら、糾弾されたのは本当ですか。

加藤 「ヒヤリング」という言葉が上から目線だ」ということでした。「何事だ。教授が権力を使うとはけしからん。自己批判せよ」と言われました。そこは「申し訳ありません」と頭を下げて収めました。

——精神科の正常化への期待が周りにあり、先生の決意もあつたわけですね。

加藤 あのままではいけない、日本の精神科が地盤沈下しているという思いもありました。とにかく、研究費を集めるに必死だったですね。

——東大教授になって3年経過して病院長になりましたね。

加藤 東大病院も赤字でした。私が病院長に

の私と看護部長が「ご苦労さま」と言って、各部署を回らないといけません。へべれけに酔っばらっているところに、突然、皇室医務主管の金沢一郎先生から電話が入って「天皇陛下が1月に前立腺がんの治療で入院されることになった」という話です。みなびつくりしてしまいました。

——その数日前、佐々木毅東大総長らとの懇談会があり、加藤先生に15階建ての新病院の14階にある豪華な特別室を案内してもらいました。不忍池も見えて景色が良く、素晴らしい病室でした。警察の警備は徹底的だったでしょう。

加藤 まず「14階のほかの個室に入院している人たちをフロアーから出せ」となりました。私



前立腺がんの手術を受けて東大病院を退院される天皇陛下を病院長として見送る=2003年



内村祐之さんの銅像と=2015年、東京都新宿区の晴和病院

が入院患者たちに謝って、ほかの階の個室に移ってもらいました。皇宮警察からは「下の13階も空っぽにせよ」と言われましたが、それは断りました。

——新病棟に各科が移ったあと、精神科も旧病棟に移したのですか。

加藤 赤レンガのとき、39床だったのを、2フロアで60床にしました。東京の東部には精神科病棟が少なく、精神医療の過疎地だから、東京都も特別に認めてくれました。広くなり、収入が上がり、平均在院日数は下がりました。

### PTSDなど研究も活性化

——東大精神科の研究も盛んになりましたか。  
加藤 大学院生も、私がやめるときには25人ほどになっていました。研究費もPTSDなどでもらって、実験室を整備しました。

——東大精神科の教授だった内村祐之さん(1897~1980年)の胸像は、東京芸術大学学長の宮田亮平さんが制作されたのですか。

加藤 知り合いの宮田さんに「彫刻家は誰がよいか」と相談に行きましたら「私でよかったです」と言われてびっくりしました。私が教授をやめるときで、東大精神科120周年として企画をし、「形に残るものを」と、120周年記念誌と内村さんの胸像を作りました。同窓生の寄付でやりました。まだ内村さんのお弟子さんがご存命でしたから、反響が良かったです。内村さん

んは東大教授を22年間やっています。東大医学部長や日本医学会会頭を歴任しました。往年の名投手で、日本プロ野球コミッショナーもした人です。顕彰してほしくないのがおかしいくらいです。胸像は2体作り、東大精神科と東京都新宿区の晴和病院に設置しました。

——晴和病院も内村祐之さんが創設したのですか。

加藤 そうです。私は東大教授を60歳で退職しましたが、「このまま終わってたまるか」と気持ちが悪くなりました。昭和の大教授になって、精神科病院の昭和と大鳥山病院の院長になりました。松沢と武蔵、鳥山の3病院はかつてご三家といわれ、東京の精神医療を担っていました。

——鳥山病院は精神科リハビリで先駆的な仕事をして、大学紛争時代には医師の自主管理もあつたのですか。

加藤 鳥山病院は第1回の呉秀三賞をもらっています。紛争に巻き込まれましたので、その余計は残って残っていました。ある意味では、東大の赤レンガと似ていました。

### 昭和と大鳥山病院も近代化

——先生が東大病院と鳥山病院のふたつの紛争の後始末をされたわけですか。

加藤 そういう巡り合わせでした。鳥山病院では精神科の近代化です。私が行く前の鳥山病院は450床あつて、稼働率は100%、長期入院が多かったです。「それでは駄目だから、変

加藤 福島県立医大の丹羽真一教授と親しいので、事情がわかり、原発事故の被害も受けた福島県いわき市に、春の大型連休の前に入りました。滋賀医大時代に阪神大震災の救援にも関わ

り、2004年の中越地震では、東大病院から私が被災地に向きました。

### 臺弘さんの名誉回復に奔走

——晴和病院の理事長もしていますか。

加藤 2年前から兼ねています。臨床はもちろん続けています。鳥山病院と晴和病院で、発達障害の人たちを外来で診ています。患者さんの希望がある限り、やめられません。

——精神医療の課題は何ですか。

加藤 ちゃんとしたエビデンスを出せるようにしないとダメです。精神科は最近、入局者も多く、停滞期を脱しました。

——恩師はどなたですか。

加藤 臺弘先生です。臺弘さんの名誉回復は私にとって重要でした。臺さんが42年前、学会の大きな会場で激しくたたかっていたときに、「そんなことはない」と叫びたかっただけで、言えませんでした。言えませんでした。目に目に見えていたし、勇気がなかったです。悔しい思いとして残っ



病院長時代の戦友の北村信・元総務課長(その後・宮崎大学副院長)を中心に当時の仲間が開いてくれた送別会=2003年

えよう」と訴えましたが、反対は相当ありました。医者の方以上はやめたので、若手をどんどん登用できて、通称「スーパー救急」という精神科救急病院にしました。

——東大教授をやめてリフレッシュして、大人の発達障害といえるアスペルガー症候群の医療も開拓しましたか。

加藤 東大にいたときに「こころの発達診療部」を正式につくりました。文部科学省の高等教育局長に直訴して実現しました。子どもの自閉症だけでなく、大人になってからの患者が来るようになって、「こういうニーズがある。なかなか変わった人たちだ」と気づきました。鳥山病院は立派なリハビリセンターがあるけれど、年寄りばかりでした。大人の発達障害を診れば活

ていました。

——半世紀以上に故・江熊要一群馬大助教授が臺弘教授の下で、統合失調症の再発を防ぐ場を患者の生活に見いだして実践した「生活臨床」がいま見直されつつあります。

加藤 生活療法と言います。臺さんが指導し、江熊先生が泥くさく実直に取り組まれました。——昨年、100歳で亡くなった臺先生の名誉回復は進みましたか。

加藤 ご遺族の意向もあつて、告別式はこじんまりとやりました。「誰か風を見たか」という80歳の時の自伝があります。名著です。80歳から亡くなる100歳までを加えて増補復刻版を出します。ことしの5月に出版記念会、実質上の一周忌に当たるしのぶ会を開いて、名誉回復につなげたいと思います。

### 加藤進昌(かとう のぶまさ)

(略歴)

- 1947年 愛知県稲沢市生まれ
- 1972年 東京大学医学部卒業
- 1973年 帝京大学精神医学教室助手
- 1975年 国立精神衛生研究所精神薄弱部研究員
- 1978年 国立精神・神経センター神経研究所研究員
- 1979年 カナダ・マニトバ大学医学部留学(～81年)
- 1983年 国立精神・神経センター神経研究所室長
- 1986年 滋賀医科大学精神医学教室助教授
- 1996年 滋賀医科大学精神医学教室教授(～99年)
- 1998年 東京大学大学院医学系研究科教授(～2007年)
- 2001年 東京大病院院長(～03年)
- 2007年 昭和大学医学部精神医学教室教授(～12年)  
昭和大学鳥山病院院長(～15年)
- 2012年 昭和大学大学院保健医療学研究科教授  
神経研究所附属晴和病院理事長
- 2014年 昭和大学発達障害医療研究所所長